

仮設住宅の継続的な支援の実践 in 釜石

今回の訪問について

今回、私たちは国内研修制度を利用して、岩手県釜石市甲子仮設を訪問してきた。東日本大震災から3年を過ぎ、復興公営住宅への転居が進んでいく中で、自殺や孤独死が増えていく時期が迫っている。それを未然に防ぐために、東京の学生が東京にいてできることはないかと企画されたのが、各仮設に学生が作成した新聞記事を配り、情報の共有をはかるというものであった。今回の訪問に向けて、事前に新聞を作成し、仮の記事として仮設住宅の担当の方に見ていただく、また、甲子仮設 B の餅つき大会の準備のお手伝いをするというのが今回の訪問の目的であった。

全2日間の日程であったが、1日目は到着後、餅つき大会の準備の手伝いをした。主な内容は、道具の運搬・冷凍かき揚げの袋詰め・かき揚げの住民への配布・豚汁の材料の準備・買い出しなどであった。準備が終了してから、新聞についての話し合いをした。2日目は終日餅つき大会の準備と手伝いをした。2日間を通し、作業の中で住民の方々との交流をはかることが目標となっていた。

学んだこと

今回の訪問で、一番印象に残ったことは、話をするものの難しさであった。私は2日目に、豚汁の材料の準備をしたり、ついたお餅につける餡子を作ったりしており、仮設の中での作業が中心となっていた。そのため、仮設住宅の女性たちとの作業が多かった。私は、作業を通して住民の方々との交流をはかりたいと考え、会話をしようとしていたが、なかなかうまくいかず、正直苦労していた。しかし、それも当然である。突然訪問してきた大学生と急に親しくなることは難しい。しかしながら、住民の方々が、私たちがつけた名札を見て、きちんと名前を呼んでくださることで、住民の方々も私たちと関わりを持つようとしてくださっていることが分かり、頑張ることができた。そして、名前を呼んでいただけることは、純粋にとてもうれしかった。その中で、たくさん交流することができたのは、お餅用の餡子を一緒に作った女性の方であった。無論、最初からうまくお話をできたわけではなかった。最初は、年末でお正月時期ということで料理の話をしてみた。というのも、私自身がおせち料理を手作りするのが好きだからであった。しかし、「震災前はよく作っていたけれど、それ以来は作らなくなった」という旨の返事をいただいて、正直「しまった。」と思った。触れてはいけない部分に触れてしまったといったと思い、申し訳なく思った。どうしようかと迷って、では普段は何をなさるんですか？趣味などはありますか？と伺ってみた。そう言ってすぐにこれももしかしたら失礼にあたるのかもと思い焦ったが、その方は編み物をしていると答えてくださった。震災復興支援のプロジェクトの一環として、注文されたものを製作し、東京などで販売会を行っているという。編み物の話になってから、その方は楽しそうにお話してくださるようになり、私は非常に嬉しく思った。今はゴ

ルフクラブのカバーを編んでいるとか、このプロジェクトで注文を受けて初めてスヌードというものを知ったとか、そういった話をしてくださった。とあるご縁があってこのプロジェクトに参加しているそうなのだが、最近は編み手が減ってきていて、もっと広まってほしいと語っていた。色々お話してくださる中で、そのプロジェクトのホームページをスマートホンで調べて一緒に見たり、その方が編んだものがどんなものか分からず画像を検索して「これですか？」と聞いたりしたところ、便利だと喜んでくださり、とても嬉しかったのを覚えている。帰り際に、新聞記事を書きたいのでインタビューをさせてほしいとお願いしたところ、承諾していただけたので、今回の訪問の大きな目的が達成されて嬉しく思う。

餅つき大会の準備の中、驚いたことは、仮設住宅を出た人もこの餅つき大会に参加し、準備をしてくださったことであった。準備の途中で、次々とやってくる仮設住宅のお母さんたちを、さきほどの女性が一人ひとり紹介してくださる中、3名ほどもうすでに仮設住宅を出た方々がいた。そのことに私は驚いた。仮設住宅を出たら、もう関わりがなくなってしまうものだと思っていたからである。こう思ったことは、素直に住民の方々に伝えた。そうしたら、仮設住宅を出たある方がこう言った。「仮設はもう出たけど、イベントがあるときにはこうして来て、顔を見に来るのよ。いい機会だから。」この言葉を聞いたとき、なぜかとても嬉しくなった。人と人との繋がりとは、どんな状況でもそう簡単に失われるものではないことを知った。そしてこの時、今回この釜石市の甲子仮設に実際に来てよかったと思った。自分の家でニュースを見るだけでは知ることができなかったことがたくさんあったからである。

実際の訪問を通し、人と会話を交わし、交流を深めるためには何かしらの手段が必要になると考えた。短時間の間に、面と向かって話すのではやはり会話を交わすことすら難しい。しかしながら、何か作業をしながらや、今回の餅つき大会ではいくつかの余興があったのだが、その余興を見ながらの方が会話しやすかった。「何か悩みはありますか？」と訊くより、雑談の間に、ふと思い出したように出てくる話題の方が会話のきっかけになりやすい。大学やアルバイト先では初対面の人と長く話す機会は少ないために、今回の訪問で初めて体験したことであった。東日本大震災から3年を過ぎた今必要な支援は、このような形の支援ではないだろうか？つまり、傾聴などをするために訪問するのではなく、たとえば何かのお手伝いをする中で話をしていくのである。

そして、こうした関わりを持った学生が新聞を作成すれば、きっと、見ず知らずの学生が作成するよりは、馴染んでもらえるだろうと考えた。私たちは、頻繁に現地を訪問できるわけではない。だからこそ、東京にいても、自分たちの身体と時間を使ってできる支援を考えなければならない。加えて、今回の行った餅つき大会のようなイベントに実際に出てくる人たちへの支援だけでなく、そういった人との関わりを持たない人への支援も考えなければならない。だからこそ、新聞記事の内容も熟考しなければならないと感じた。今回訪問した仮設住宅の方の一人が、「一番大切なのは笑顔。」という言葉を繰り返し使って

いた。その方は、たくさん冗談を言って私たちを笑わせ、確かにご本人も常に笑顔だった。人との関わりの中で、笑顔になることは少なからずある。しかしながら、人との関わりをあまり持たない人も笑顔にするには、私たちはどうすればいいのか。東京にいながらの支援としては、工夫した新聞記事を作り、それを読んで、笑顔とまではいかずとも、少しでも楽しいと思ってもらえるよう尽力するべきであると改めて実感した。正直なところ、実際に訪問する前は、新聞を作成することの意義がぼんやりとしていたが、今回の訪問を通して、心から「力になりたい。」と思うようになった。

おわりに

支援の形は、時を経るごとに変わってくる。支援の形は変わっても、需要は変わっていないはずだが、供給は減るばかりである。それは、支援をする側にまわる人々の記憶から薄れるのと同時に、もう大丈夫だろうという気持ちが生まれていることも多少なりともあるのかもしれない。しかし、どんなに年月が経っても、支援の形を変え、常に考えていかなければならない。支援に終わりはない。助け合おうと尽力する人たちがいる。そんな一人に、私もなりたいと考える。